
Poison Chocolat

ミルク・ショコラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

P o i s o n C h o c c o l a t

【Nコード】

N 2 5 6 5 P

【作者名】

ミルク・シヨコラ

【あらすじ】

ごく普通の生活を送るように見える4人の中学生には、実は裏の顔が！？一体、彼らの正体は何なのか。そして、彼らの目的とは？4人を待ち受ける未来には、どんな秘密が待っているのか……。ちよつと不思議なファンタジーをどうぞお楽しみください♪

ポイズンシヨコラ（前書き）

初投稿です！ミルクさんは忙しいのでシヨコラが前書き書いてます
では、どうぞー

ポイズンショコラ

森の中にある小さな洋館――

その名は「P o i s s o n C h o c o l a t」

今日もそこでは甘く危険な香りが漂う――

「おい、耀！ にーちゃんが呼んでるぞ！」

「ん、ありがとー」

ある日の昼休み。お弁当の包みを広げていた^{ひつぎひかる}緋月耀は、級友に呼ばれて重い腰を上げた。後ろの扉を見ると、双子の兄の^{あきひ}彰が立っている。

「何？」

耀はぶつきらぼうに聞いた。すると彰は筒状のものを突き出した。

「水筒、忘れてった」

耀はそれをひったくるように受け取った。

「ありがと」

「ん」

とは言うものの彰は動こうとしない。耀はイライラしながら言った。

「もう用ないよね？」

「ないな。帰るわ」

「ん、じゃね」

耀は早口でそう言つと背中を向けて戻って行った。それを見届けて彰も歩き出す。

「ねえねえアンナ！ 今日どこで食べるー？」

彰の横を5組の紫堂^{しんどう}アンナと桃瀬^{ももせ}マリアが通り過ぎて行った。

「どこでもいい……」

「じゃあトイレ？」

「それはイヤ」

楽しそうに話す二人を眺めながら彰は心の中で呟いた。

『今日も平和だな……』

外はついさつき雨が止んだばかりで地面はぬかるんでいる。彰はその場所へ続く道を一人で歩いていった。後ろからは、男子の集団の騒ぎ声が微かに聞こえる。どうやらその中には耀も含まれているようだ。

「あ、じゃあ俺こつちだから！ バイバイ！」

後ろが急に静かになって、聞きなれた足音が響く。

その場所がどんどん近づいてきて、彰はポケットから派手な装飾な鍵を取り出した。

「やっと着いた！」

マリアは嬉しそうに言っただアノブに手を掛ける。アンナは何も言わない。

カランカラン」

「遅いぞ、お前ら……！」

——我らがリーダーはテーブルを拭きながら待っていた。

「しょーがないじゃん！ 数学の平松につかまって大変だったの！」

マリアはかばんを床に置きながら叫んだ。その声に反応して、チヨコレートをつまんでいた耀も顔を上げる。

「俺も平松嫌い」

「そうよねー、アイツうるさい！」

いよいよ本格的に愚痴大会が始まる気配を察知したのか、今まで何も言葉を発しなかったアンナが言った。

「愚痴はいいから、そろそろ着替えましょう。……店長さんがうる

さいわ」

今にもキレそうな彰の顔を見て、三人は黙って席を立った。

「——そろったな。始めるぞ」

四人は円になってテーブルを囲んだ。

「今日は……」

黒い手帳を片手に話し始めた少年は彰。またの名を、『ガナツシユ』という。

ここ『Poison Chocolate』の店長であり、個性的な店員たちをまとめるリーダーだ。それ故なのか、学校では比較的穏やかだが仕事には誰よりも厳しく、妥協を許さない。今日もきちつと着こなした燕尾服のすそを翻しながら、仕事に励んでいる。

「で、坂下夫人の睡眠薬だが……」

ガナツシユは説明していた手をふと止めた。

「おいミルフィーユ。まさか寝ているのではあるまいな」

『ミルフィーユ』、と呼ばれた少年——すなわち耀はあわてて顔を上げた。視界がぼんやりするようで、目を何度かしばたかせる。

「ね、寝てなんていないよ！」

否定する手の動きに合わせて、明るいブラウンの髪が揺れる。あまりに激しく振ったので、頭に乗せていたミニハットがずり落ちた。柔らかな社交的な性格の彼は、髪と同色の瞳でガナツシユをみつめる。

黒曜のような髪を持ち、冴えた黒瞳くろめのガナツシユ。あめ色の髪と甘く輝く瞳をもつミルフィーユ。

この二人が双子だと瞬時で見抜いたのはまだこの世に二人しかない。そのくらい共通点のない双子だったが、それはそれで新鮮でいいらしい。

「それに、ティラちゃんもぼーっとしてたよ！」

「ひどーい！ そんなふうじゃないわ！ 濡れ衣よ！」

ミルフィーユの言葉に、明るいオレンジ色の髪をきつくツインテールに結んだ女の子が立ち上がる。

「ミルちゃんのおバカっ！」

フリルを付け足したゴスロリの袖で、力任せにミルフィーユの頭をはたく。

「痛ッ！ ティラちゃんごめん」

ミルフィーユは叩かれた場所をおさえながら謝った。

彼女——マリアのことを『ティラちゃん』と呼ぶのはミルフィーユだけで、彼女の別名は『ティラミス』と言う。

甘えん坊でいたずら好きな性格はミルフィーユと非常に合うらしく、二人はお互いのことを『ミルちゃん』『ティラちゃん』と呼び合うほど仲が良い。

「ティラミス。その辺にしてあげなさい、ミルフィーユが可哀そうよ」

ポカポカとミルフィーユの頭を叩いているティラミスを、『タルト』の名を持つアンナが止めた。

「タルト！ でも！」

「大好きなミルちゃんに嫌われちゃうわよ？」

タルトの的を射た発言に、ティラミスは黙って着席した。タルトは何事もなかったかのようにガナッシュの話を促す。

少し紫が入っているのかすごく落ち着いたストレートの黒髪に、背筋を伸ばして座っているところは、とてもティラミスと同一年には見えない。その落ち着きとリード力から『影の店長』と呼ばれている。

「まあともかく、今日優先すべきは浅香夫人のご依頼だ！ ご主人暗殺のためのエクレアを作る。いつものように、タルトは俺と一緒に薬の調合！ ミルフィーユとティラミスはエクレア作り！」

そう、この四人は人を殺すこともできるお菓子『P o i s s o n
C h o c c o l a t 』を作っているのだ。

ポイズンシヨコラ（後書き）

どうでしたか？感想、評価等よかったらよろしくお願いします！

ココアパウダー（前書き）

なんと復活！

詳しくは活動報告にて♪

ココアパウダー

「さあ、今日も始めるか」

ガナッシュが手帳を片手で閉じながら言った。これは始まりの合図。ミーティングが終わった後に、リーダーが言うことになっている。その声にこたえるように、4人は席を立った。

普段、ポイズン・シヨコラは仕事を二手に分けて行っている。

ガナッシュとタルトは薬品づくりそのものを。ティラミスとミルフィーユはそれを覆い隠す菓子類の製作を。それを最後に調整して、やっとひとつ完成する。

その日は、手前の薬品室でガナッシュたちが、奥にある製菓室（ティラミス曰く、『おかしルーム』）でミルフィーユたちが作業をしていた。

「まず、ウサギタケとリーフリンを0.3gずつ混ぜるぞ」

薬品室では浅香夫人に依頼された、主人を暗殺するための毒薬を調整していた。手帳を確認しながら、ガナッシュはタルトに指示を出してゆく。

タルトは黙って薬品棚に移動すると、正確にグラムを計ってピーカーの中へ入れてゆく。そのピーカーは先祖代々伝わってきたもので、もう相当な年季が入ってる。だが、特注で作られたその黒いピーカーには、白い文字で『Poison Chocolate』の文字が入れてあり、ガナッシュは密かに気に入っている。

「次は……」

次の指示を出そうとしたガナッシュの耳に突如、どさーっ、という音が響いた。ガナッシュの動きがぴたりと止まる。

「……奥ね……」

ガナッシュの心を読んだかのようにタルトが呟く。額に青筋を浮

かべたガナツシュは、ずんずんと大股で製菓室へと歩いて行った。
「何してるんだお前たち！」

レースのカバーやティラミスのアクセサリーで飾られた派手なドアを思いつきり引つ張る。（反動でフックに懸けてあった赤いペンダントが吹っ飛んで行った。）

「なっ……！」

息をのむガナツシュ。そこには……。

ココアパウダーを頭からかぶった二人がいた。

「お前ら……」

「ちっ、違うの！」

怒鳴ろうとしたガナツシュに、ティラミスが必死に弁解する。

「し、新発売のココアパウダーの味見ないとねーって言つて、普通にやったらつままないから、かくれんぼして勝った方が先に食べようっていう話になったの！ で、ミルちゃんが最初パウダーの棚の下に隠れて、そしたら棚がぐらぐらってなつて……あれ？」

「ティラちゃん！ 全然フォローになつてないよ！」

ん？ ん？ と頭の中を必死に整理するティラミス。小声で突っ込みを入れるミルフィーユ。二人を見ていたガナツシュのこぶしがわなわなと震える。

「言いわけはいらない！」

ガナツシュの大声で、がっしやーんと軽い棚が一つ倒れる。

「お前たちはいつもいつも寄つてたかつて下らないことばかりやりやがつて！ 一人だけでも十分下らないのに、二人集まるとどうしてこうも下らないパワーマックスにしちゃうんだ！ 今日朝まで説教だ！ 正座しろ、正座！」

「「えー！？」」

そのとき、静かにドアが開いた。

「盛り上がつてるところ悪いけれど。ガナツシュ、ミス・アールグ

レイがいらしたわ。お説教は後にして、応対してちょうだい」

タルトが顔をのぞかせて、ガナッシュにそう告げた。

「ああ。わかった」

立ち上がって部屋から出ていくガナッシュ。出て行き様に振り向いて、二人をにらむ。

「説教は終わってないからな！」

あまりの執念深さに、ミルフィーユとティラミスはがくがくと肯いた。

「……さて」

ガナッシュが出て行ったあと、タルトはぐちゃぐちゃになった製菓室を見回した。

「お掃除しましょうか。ミルフィーユ、薬品室から掃除機持ってきなさい。ティラミスは雑巾とバケツ。……うるさい店長さんが帰ってくる前に、片付けちゃいましょう」

少し微笑んでいったタルトに、二人は目を輝かせた。

「手伝ってくれるの！？ あとでチェリーパイ作るね！」

「アップルティーも淹れてよ」

こうして、3人は仲良く掃除を始めた。

ココアパウダー（後書き）

どうでしたでしょうか……？

私、シヨコラはミルクに任せっきりで

↑

商談（前書き）

遅くなりました！第三話♪

ミルクが怖いくらいに書いております。ザザザザーって感じで
すかね……？（意味不明ですいません）

商談

ガナツシュは、ため息をつきながら製菓室から出た。館の真ん中を貫く広くて古い廊下を通り、応接室へと歩を進める。

応接室に着くと、ガナツシュはドアの前で軽く身だしなみを整えた。(いつ着けられたのか知らないが、ピンクのリボンが燕尾服のすそに結んであったから、それも回収した)それから大きく息を吸い込んで、ドアをノックした。

「遅かったな、ガナツシュ」

ドアを開けると、アールグレイはソファアーにどっかりと座って待っていた。

「申し訳ございません」

「どーせまた、お前の弟と、あのうるさい女が何かやらかしたんだろう？ お前の弟、えーと……ミルクレープだっけ？」

「ミルフィーユです」

「あ、そうだったか？ 惜しいな。最初はあつてる」

ミス・アールグレイ。彼女は闇の薬草業者だ。毒薬から良薬まで、様々な種類の薬草を扱っている。ポイズンシヨコラも、彼女の客のひとつだ。

色素の薄いブラウンの髪を、高い位置でひとつにくくった彼女は、かなり美しい。先代の時からこの店に出入りしているそうだが、彼女の白い横顔からは全く老けというものを感ぜられない。真っ赤な唇に、切れ長の瞳。この容姿で何人の男を騙したのだろう。

「失礼します」

透き通った声と共に後ろの扉が静かに開いた。いい香りを立てる紅茶の盆を片手にタルトが入ってくる。静かに二人の前に紅茶を並べると、ドアの脇に控えた。

「さて……今日はアメガシの葉のいいやつを入荷したよ。一瓶持っ

てくか？」

「アメガシ……ですか？」

「おや、ポイズンシヨコラの若旦那でもご存知ないのかい？ アメガシは精神安定剤によく使われる葉の一種さ」

精神安定剤。それはポイズンシヨコラが得意とする薬品のひとつ。即効性が強く、しかも長持ちするということとでわざわざ遠くから求めにくる人も多い。

「これがあれば、お前さんのつくる安定剤の質も上がるだろう」

「……じゃあ、試しに一つだけ」

なぜか拗ねたように応えたガナツシュに、アールグレイはクスリと笑った。

「そういう生意気なところ、親父さんにそっくりだな。あいつもお前くらいの年の頃は生意気だった」

「親父は関係ありません」

ソファアにのけぞりながら言ったアールグレイに、ガナツシュは即座に言い返した。タルトが後ろで息をのんだのがわかる。

冷たい瞳のガナツシュを見て、アールグレイはさも楽しそうににやりと笑った。

「どうしてお前はそんなに父親が嫌いなんだ？」

「もう父のことは……」

「お前らを捨てたからか？」

話を終わらせようとしたガナツシュを遮って、アールグレイが言った。その言葉にガナツシュの顔色が変わる。

「あんた……」

「ガナツシュ！」

思わず立ち上がったガナツシュを、タルトが慌てて止める。その声にガナツシュは下唇を噛むと、アールグレイに一礼して部屋を出て行った。

「主が失礼を。申し訳ございません」

頭を下げたタルトにアールグレイは笑いかけた。

「いや、いいんだよ。こっちが刺激したんだし」

立ち上がりかけたアールグレイに、タルトは一枚の紙を渡した。

「ここに発注するものが控えてあります。これをお願いします」

仕事に余念のない影のボスを見て、アールグレイは密かに苦笑した。

アールグレイが帰った後の応接室。

「さて……」

タルトはガナッシュが出て行ったあとのドアを見つめた。

『どこへ行ったのかしら——？』

商談（後書き）

どうでしたでしょうか？

実は、明日はミルクと遊びに行くんです〜ランラン

記憶の中の父親（前書き）

ミルクに何も言わず投稿。

別にいいよね？そういうのも承知しているはずです。

記憶の中の父親

——どうして親父が出てくるんだ！

ガナツシユは廊下を駆け足で進みながら胸の中で呟いた。そしてそのまま、物置にしている小さな部屋へ駆け込む。

薄暗い部屋で膝を抱えて、その間に顔をうずめて、すべてを遮断した。もう父親のことを考えなくてもいいように。

しかし心を闇に追いやり、空っぽにすればするほど父親のことが頭に浮かぶ。ふわふわと漂う記憶の中から、ひとつの情景が浮かび上がってきた——。

ガナツシユとミルフィーユがまだ幼かった頃。まだ二人が『ガナツシユとミルフィーユ』ではなく、『彰と耀』だった頃のこと。

「おとしゃん。どこ行くの？」

おぼつかない足取りで父の足にしがみついたミルフィーユは、上目づかいで彼を見つめた。その後ろから、同じくよちよちとガナツシユがついてくる。

『お父さんは仕事にいくんだよ』

そういう父は、いつも家を出ていく黒いんだけど派手な服（今考えれば自分たちの着てる店の制服）ではなくて、シンプルな白いセーターを着ていた。

『あきら。ひかる』

父は小さな二人をそつと抱き上げると、目を合わせた。

『お前たちに名前をあげよう』

意味が分からずにきょとんとしている二人に笑いかけて、父は口を開いた。

『あきらはガナツシユ』『ひかるはミルフィーユ』

彼は少し嬉しそうに言いながら二人を下に降ろす。意味も分からずニコニコしているミルフィーユと、首を傾げて不思議そうな顔を

しているガナツシュの二人の頭を交互に撫でて、優しく言った。

『お前たちは双子なんだから、お互いに助け合って立派にお父さんの跡を継いでくれよ』

「うんっ！」

元気よく答えた二人の息子を見て、彼は満足そうに微笑むとポケットから何かを出した。それは綺麗に包装された二つのパウンドケーキだった。

ほのかに焼き色のついたそれは、幼い二人のハートをがっちりつかんだ。

「うわあ！」「美味しそう！」

包みを夢中で開けている二人を横目に、父は奥から出てきた母と少し話をしていた。そして、二人がパウンドケーキを食べ終わるころには父はそこにはおらず、一度も戻ってはこなかった――。

ガナツシュもミルフィーユも最初の頃はよく意味が分からなかった。ただ戻ってこなくて少しさみしい、というくらいで。

しかし大きくなるにつれ、二人は父親の存在の大きさを思い知った。周りはみんな父親がいて、ケンカしたり、物をねだったりしている。だが二人にはそれはできない。

ガナツシュにはそれが重くのしかかり、父親への感情は、次第に憎しみへと変わっていったのだった。

記憶の中の父親（後書き）

東海の方で地震がありましたね……。
あんまり揺れませんでした。怖いよー

ガナツシュの気持ち（前書き）

サブタイトルとか考えるの難しいんですけどー……
みなさん、どうやって考えてるのでしょうか？

ガナツシュの気持ち

「あきら。何やってるの？」

隣から聞きなれた声が聞こえた。業務時間外と判断したのか、本名で呼びかけてくる。

「ひかる……」

いつのまにか隣にミルフィーユが座り込んでいた。にこにこ微笑みながら、軽く手を振っている。

「別に……何でもない……」

照れもあつて、ふつと顔をミルフィーユから背けた。

「そう？ こんな薄暗いところで膝抱えて何やってたの？ 餅つき？」

「んなわけないだろ」

いつもの冗談に、ふつとガナツシュの表情が緩んだ。その笑顔を見て、何食わぬ顔で、ミルフィーユはもう一度口を開いた。

「嘘。彰、お父さんのこと考えてたでしょ？」

ガナツシュの笑顔が凍り付いた。次に、少し斜めにうつむいた。「考えてないよ」

必死に隠そうとしているのが、ミルフィーユにはよくわかった。昔から何かを我慢したり隠そうとすると、ガナツシュはこうやって変なうつむき方をする。

「俺の前でやせがまんしなくてもいいじゃん」

そう言つてミルフィーユはガナツシュの背中に手を置いた。小刻みに震えている。

「……考えた。すごい久しぶりに」

しばらく時がたつて、ガナツシュが小さく呟いた。耀は静かに相槌を打つ。

「ミス・アールグレイに親父のこと言われて。出て行った時のこと

とか、思い出してた」

「ああ……」

ミルフィーユも思い返していた。あれから時がたって、少し大きくなった二人がお互いに覚えている部分をつなぎ合わせてつくった共同のビジョン。

「……どうだった」

どう言ったらいいのかわからずに、ミルフィーユはちょっと外れたことを尋ねてしまった。でもガナツシュは、珍しくそれに気づかない。

「……何か、めっちゃ悲しかった……」

少し言葉の末尾がぶれる。小さいころから、ガナツシュはこういう泣き方をする。ミルフィーユは強がりな双子の兄を眺めて、少しため息をついた。

「彰って、昔っから素直じゃないねえ」

ガナツシュの震えがぴたりと止まった。彼が顔を上げるより早く、ミルフィーユは口を開いた。

「泣きたいなら、泣いてもいいのに」

そう言って、背中に触れていた手にそっと力を入れた。ガナツシュの体がミルフィーユの肩口へ倒れる。鼻をすすりあげる音が聞こえる。ガナツシュがしゃくりあげる音も聞こえる。

「ひかる……俺やつぱり父さん嫌いだよ……」

泣きながら呟くガナツシュに、ミルフィーユはうん、うん、と優しく相槌を打つ。聞いてやることしかできない。

「泣き止むまでいてあげるから……」

ガナツシュの背を優しくさすりながら、ミルフィーユは考えていた。

どうしてこんなに、彰は父を憎むのか？と。

ガナツシュの気持ち（後書き）

感想くださると嬉しいです♪

アップルパイ（前書き）

久しぶりの投稿です
今回は、のほほん

アップルパイ

製菓室にはいい香りが漂っていた。ティラミスがチェリーパイを焼いているのだ。しかし、チェリーとは違う匂いがする。

「ティラミス。ガナツシュを見なかった？」

応接室を通り、製菓室に足を踏み入れたタルトは、鼻歌を歌っているティラミスに尋ねた。

「見てないよー。でもさっきミルちゃんが物置に入ってたから、そこにいるのかも」

ティラミスはオーブンの温度を確かめながら言った。

「あ、でも」

製菓室を出て行こうとするタルトの背中に、ティラミスは言う。

「今は行かない方がいいかもね。中でグズグズ言ってたから。ガナツシュが嫌かも」

その言葉を聞いて、タルトは足を止めた。そして、そのままティラミスの元へ引き返す。

「チェリーパイはうまく焼けそうかしら？」

「ええ、もちろんよ！ 私の技術に狂いはないわ！ あ、でもねチェリーパイはやめたかったの」

タルトは首を傾げると、ティラミスに尋ねる。

「なぜ？」

「なんかねー、ミルちゃんがガナツシュはさくらんぼ食べれないから、アップルパイにしてやってくれないかって、頼まれたの」

「……そう」

タルトは近くの椅子に腰を下ろした。ティラミスは続ける。

「ガナツシュとミルちゃんって、実は仲良しだね。何で学校では仲悪いの？」

「Poison chocolateの存在を隠すために、仲悪いふりをしているそうだけど」

「それって……意味ある？」

首を傾げながら尋ねるティラミスに、タルトは意味ありげな笑みをおくる。

「怪しいわね」

タルトの答えに、気まずい沈黙が製菓室に舞い降りる。

リリリリ……

オーブンが鳴った。ティラミスがそつと開けると、中からはアップルパイの甘い香りが漂ってくる。

「紅茶をいれましょうか」

タルトが座っていた椅子から腰をあげた。

「アップルパイは焼けたのー？」

そのとき、ミルフィーユが製菓室に戻ってきた。その後ろには、いつものように毅然とした様子のガナツシュが立っている。

『いつものPoison Chocolateね』

タルトは心の中で呟くと、こっそりと微笑んだ。

「タルト、冷めないうちに食べましょう！」

早くもテーブルで騒いでいるティラミス肯くと、タルトは紅茶のカップがのったトレイを持ち上げ、テーブルに向って歩き出した。

アップルパイ（後書き）

疲れた……。

ミルクに睨まれながら必死に書いた甲斐あったでしょうか……？

トッピングの行方(前書き)

めちゃくちゃお久しぶりです！

高校生になり、忙しさにかまけて更新しなかったことをお詫びします。

これからもうこんなでしょうが、せめて夏休みは頑張りますね！

トッピングの行方

ここはP o i s s o n C h o c c o l a t。今日も甘い香りが漂う……。

「ちょっとミルちゃん！ カラーシュガーつまみ食いしたのあんたでしょ!？」

「してないよ！ そんな小さいものわざわざつままないよ！」

「ティラミス。それよりあなた、昨日私が買ってきたマーブルチョコ食べたでしょ」

「お前らしいから少し黙れ!!」

暑い夏の昼下がり。4人はいつものように暑苦しい口げんかを繰り広げていた。最近は暑さのせいかアイスクリーム商品の発注が増え、トッピングが多めに用意されるようになった。しかし、仕事初めのミーティングで、そのトッピングがいつの間にか減っている、というガナツシュの指摘に反論した結果、今に至ったのである。

「意見は手を挙げてから、はい」

暑いのにきちんとシャツのボタンを閉めているガナツシュが堅苦しく言う。全員の手が上がった。

「はいミルフィーユ」

「僕はトッピング食べてないよ！」

ミルフィーユがガナツシュの声を遮らんばかりに答えた。彼はシヤツは一応第三ボタンまで閉めているけれど、リボンをだらしなく垂らしている。ガナツシュはまずそれに眉をひそめてから、ゆつくりと尋ねた。

「じゃあ誰が食ってるんだ？」

「ティラちゃんでしょ」

「何よ！ あたし食べてないわ!!」

さつきからいらいらしながらミルフィーユをみていたティラミスが思い切り立ち上がった。ミニのゴスロリのすそが大きく揺れる。

「ティラミス、胸開けすぎ」

この暑い中、長袖のゴスロリをきちんと着こなしているタルトが、さりげなく胸のパッチを留めた。

「暑いの！ それにミルちゃん、あたしこの前星形のシュガー食べてるの見ちゃったんだから！」

「っ！ あの時はたまたま……」

黙り込むミルフィーユ。ティラミスは勝ち誇った笑みを浮かべ、さつさと着席した。ミルフィーユもつられて座る。

「じゃあ最後に」

そう言ってタルトが静かに手を挙げた。

「お客さんが見えよ。二人とも、服装を整えて」

全員が玄関の方を振り向くと、ドアにはめられたガラスの向こうにお下げ頭が見えた。困ったようにドアの前をうろついている。

ガナッシュはコホンと咳払いをすると、慌ててボタンを留める二人に目を遣った。二人の服装が整ったところで、扉へ向かう。

優雅な仕草で扉を開いた。

「ようこそ、P o i s s o n C h o c c o l a t へ。」

トッピンダの行方（後書き）

さてさて、どうでしたでしょうか？
活動報告も書きますね

黒髪の少女（前書き）

今回はちょっと短め。

今までとは少し雰囲気が変わりますね

黒髪の少女

ティラミスを入れたローズティーを前に、客は戸惑っていた。終始落ち着きなくあたりを見回している。

「まず、お名前をお聞かせ願えますか」

ガナツシュが黒い手帳を開きながら言った。

「あ……南洋高校1年の、八木百合子です」

真っ黒な髪をお下げに結び、真っ白な頬には全く化粧つ気がない。16歳の彼女は実年齢よりかなり幼く見えた。

戸惑いながらティーカップを持ち上げる彼女の白い指先には、きらきらと光る指輪がはまっている。

南洋高校はガナツシュたちの通う学校だが、4人はあえて反応をしなかった。素性を明かさないためだ。いくらチャラチャラしているティラミスやミルフィーユも、それくらいのプロ意識はある。

「今日は何のご用事で？」

ガナツシュが黒い手帳を開きながら尋ねると、百合子は慌ててティーカップをソーサーに戻した。

「あのっ……その前に、代金ってどうか報酬って……」

「報酬はあなたが一番大切なものを頂きます」

後ろに立っていたティラミスがにこやかに答える。百合子は何だか落ち着かない様子で、ぎこちなく肯いた。

ポイズンシヨコラは、思いをチョコレートにするお店だ。お客様クライアントの大切なものから抽出した『思い』をチョコレートに込めて、望みをかなえる。

しかし『思い』を失ったものは、塵となって消え、もう元には戻らない。

ガナツシュは百合子の動揺が落ち着くのを待って尋ねた。

「それで、今日は何のご依頼で？」

すると次の瞬間、彼女はその幼げな見た目に似合わぬ言葉を何のためらいもなく発した。

「殺してほしい人がいるんです」

黒髪の少女（後書き）

どうでしたでしょうか？

よかったら、感想・意見など書きちゃってくださいとありがたいです！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2565p/>

Poison Chocolat

2011年8月17日03時26分発行